



講師

阿部 志郎

東京女子大学理事長

記念講演『奉仕の心』

太平洋戦争が終わった2年後、昭和22年の9月14日に関東地方を大型台風が襲いました。これを当時は女性名詞を使い、“キャサリン台風”と申しました。関東一帯が被害を受けました。一番大きな被害を受けたのが東京でした。利根川・荒川が決壊をし、東京の下町一帯が冠水をしました。2300名の犠牲者が出るという大惨事になりました。

私は学生でした。いくつかの大学の学生たちが集まって救援隊を作り、なげなしの物を皆さんから出していただいて、小学校でテントを借り現地に参りましたのが、冠水をした3日後でした。若い学生ばかりで、行けば感激して迎えられるという自負もございました。

テント張りの本部に救援の申し込みをしますと、何名かのおじさん方が座っておられます。皆さん町内会長でございました。案に相違してこの方々が私どもを迎える姿勢は、誠に冷やかでした。こんな筈ではないと思いました。その中の1人が「まあいいからお座んなさい」と私どもを筵の上に座らせ、被害状況の説明をしてくれました。そして、エピソードを1つこの方が加えたのです。

浅草言問橋の橋の下に、当時バタ屋さんと申しましたが、廃品業者の集落があったそうです。一晩のうちにその集落が洗い流されました。そこを指導していたのが、ゼノさんという、これは真っ白な髭を生やし“髭のゼノさん”といわれた大変有名なカトリック修道士でした。ゼノさんは、台風の翌朝蘭市に行つてろうそくをたくさん買って、それを夕方ボートに乗せて回ったのです。二階家にみんな逃れておりました。だんだん暗くなり、飲む水もない、食べる物もない。しかも電気はつかない。水が刻々増水をして、2mの冠水でした。不安と恐怖に苛まれている人々を一軒一軒ゼノさんが回って、励ましの言葉と共にろうそくとマッチを配って歩きました。この話をしてくれた町内会長さんが、ゼノさんにどれだけ励まされたか分からない。こういう言葉を切ったのです。

私どもは言外に、それなのに君たちは今ごろ来て何をしようとするのか、という態度を感じ、頭をうちのめされる思いをしたことを、私は今でも忘れたことがありません。災害に襲われた人が求めるものは、いま食べる物、着る着物、住む家なのです。その人々に一本のろうそくを配ったところで何の価値もないです。にもかかわらず、そのろうそくを配る行為に人々は災害から立ち上がる勇気をあたえられた、という教訓を私は学びました。

サービスというのは、物を渡すことではありません。その行為を通して、生きる希望を届けることだと思います。ゼノという人はそれをいたしました。ろうそくは、自分の体を燃やし、焼いて光を出すのです。この光が人々に力を

与えます。

ソニーを創業されました井深大さんはお嬢さんが障害児です。多恵子さんといわれます。井深さんは言われました。「多恵子は私にとっての十字架である。」重荷であったと思います。「多恵子は私にとっての十字架。しかし、多恵子は私の光だ。」とおっしゃったのです。多恵子さんの中に光を見、その光に井深さんは父親として照らされ、その光を井深さんはたくさんの子供たちに分かち与えているのです。この光を、私どもの人生を通して、果たしてどれだけ求めてきたのか。その光を人に分かち合うことに、どれだけ私どもが熱意を持ってきたのかを問われるのであります。

ベルジャエフというヨーロッパの有名な哲学者が残しました言葉に、「自分のパンを心配するのは、物質的問題である。人のパンを心配するのは精神的問題である」とあります。

私どもは物質的な生活を戦後送ってまいりました。戦争が終わった直後の総選挙に、政治家が掲げたスローガンの1つは、「いわし1匹に米3合」でした。当時配給米は2合3勺でしたが、その配給は白米ではなく、遅配、欠配続きでした。せめて1日3合の米と共に、1匹のいわしのカロリーを取りたいという切実な叫びでした。今わたしたち、毎日何十匹分のイワシの栄養を取ることができるようになったのでしょうか。そういう貧しさの中に置かれた私どもは、あながち貧しいとは思ってませんでした。一方に金持ちがいて、自分に金がないから貧乏だと思うので、相対的な概念です。右を見ても左を見ても同じ金のない人ですと、自分だけ貧乏という気持ちにならないもので、そういう窮乏の生活の中でお互いさまといって、お裾分けなどをした覚えがございます。

だんだん経済が成長しました。昭和33年という年に私のところに下の娘が生まれました。病院から退院をする前の日に、私は小さな冷蔵庫ですけれども、電気冷蔵庫を買ったのを覚えてます。その時すでに手回しですけれども、電気洗濯機を持ってました。そしてテレビも持っていたと思います。この3つを三種の神器と申しまして、これを手にするためにみんな一生懸命働いたのです。それがだんだんと、ステレオになり、車になり、今は携帯になるわけです。自分自身の消費生活を拡大することに狂奔してきたのであります。

その昭和33年に、巨人の長嶋が背番号3をつけて登場してまいりました。昭和33年に東京タワーが立ちました。この年に、日本は初めてアメリカに車を輸出しました。30台の車をアメリカに持ってまいりましたところ、ハイウエーに乗れないのです。ダッシュ力がありませんので、ヨタヨ

タ、ヨタヨタ走って危険でした。高速に乗ってもすぐに故障をしたので、実に評判が悪かったのです。アメリカ人は何と言ったか。持っていった車がトヨペットですが、「トイペットではないのか。これはおもちゃだ。」と言って笑ったのです。無理もありません。昭和33年には、まだ日本に高速道は1本もできておりませんから、走った経験がなかったのです。

年とともに車に改良を加え、アメリカに1年240万台車を輸出する年がまいりました。飛ぶように売れ、アメリカの自動車産業をおびやかす、貿易摩擦をおこしました。以来自主規制をしています。30台の評判の悪い車から、200万台へと発展するのに要した時間は20年でした。この20年という時間の短さ、スピードの速さを経済成長の上にならざるを得ない高度とつけて表現をしたのです。しかしながら、20年という時間は短すぎました。短いゆえに矛盾が生じ、無理がおこります。それが今、私どもの社会に陰をおとっております。

経済成長のおかげで豊かになりました。これを可能にしたのが、もちろん工業化です。この時代の合言葉は“バスに乗り遅れるな”でした。バスは1台しか走っていない、飛び乗れ。私も一生懸命目まぐるしく変わっていく社会の後を追いかけて、飛び乗ろうといたしました。人を押し分けて、自分だけ乗りたかった。この時に走れない人がいる、飛び乗れない人がいることを、全くといっていいほど念頭においてませんでした。走れない人、飛び乗れない人を置いてきぼりにしてきたのです。

世界で義務教育が一番普及しているといわれるこの日本において、障害児を学校に入れなかったのです。障害児が学校に入れるようになりましたのが昭和54年で、戦後34年という長い時間を必要としました。その理由は、障害児に生産性がないからです。日本の社会が求めたのは働ける人間です。戦後定着した人間観は、生産力・効率・知識・学歴・出自です。そこで教育は平均主義になりました。平均よりも高い子供を社会に送り出さなければなりません。そ



こで偏差値を設け、輪切りにしました。ここからもれた子供、ついていけない子供を“落ちこぼれ”という言葉であらわしたのです。こういうなかからいじめが起こり、家庭内暴力、校内暴力、新しい言葉で家庭崩壊、そして殺人にまで及んでおります。子供たちは苦しんでいます。

そしてもっと大きな取り残される人々が出ました。それが年寄りです。年をとることは労働能力の喪失ですから、日本の社会で用はないのです。そのままにいたしました。しかしあまりに数が増え、問題は深刻になって、老人問題として火をふいたのは昭和45年ごろのことでした。豊かになっていく中で、若い女性の間でささやかれた言葉がございます。「家つき、カーつき、ばばあぬき」で、結婚をする相手をさした言葉で、持家があること、まだ車の少ない時代ですが、車を持っていること、そして姑のいないこと。長男はごめん。これが若い女性の中の流行になったのです。ばばあぬき、人間否定です。ものだけを大事にして人間を否定する風潮です。

こうした中から、さまざまな現象がおこってまいりました。この横須賀がその高度経済成長期の時代ですが、深刻な教育問題にぶつかりました。中学生が学校に弁当を持ってまいりますのに、箸を持ってこない生徒がでてまいりました。教師が箸を持ってこいという、「俺、箸がなくても食べるぞ」と開き直って、その生徒が弁当箱からかぶりついて食べる。まるで犬のように食べますので教師たちはこれを犬喰いと称しました。この町に公立中学が25校ございますが、その全部に広がっていったのです。

日本で一番に受ける芝居は忠臣蔵です。12月に入りますと、テレビも忠臣蔵です。忠臣蔵に花見の茶屋という場面があります。大石蔵内助が茶屋遊びをし、酒に酔いしれ、市井の人が足蹴にする食べ物を四つんばいになって食べるのです。蔵内助が敵討ちをする意思をもっていないことを表そうとしました。

私たちはパンなくして生きることはできません。衣・食・住は基本的欲求ですから、充足されなければ生活ができま

せん。しかし、パンのみで生きるのではない一面を人間はもっています。戦中戦後のあのひもじかった時代に、人が上から下へ投げ与えるものを犬のように食べたいとは誰一人願わなかったのです。それは、人間の心を失うことを物語るからです。動物と人間は違います。動物は下を向いて餌を求めてさまよい歩きます。餌をうることが動物の生活の目的です。人間はどんなに貧しくてもパンをうることは目的になりえないのです。人間はアントローポスという言葉からなっています。その意味は、上を仰ぐことです。上を仰いでやまない存在が人間です。衣食住を手段にしてより高い人生に向かって歩もうといたします。

犬喰い、それは飽食のゆえに、豊かさのゆえに、手段であるべきパンがいつのまにか目的化されたのではないか。パンが目的化されるとは生きる意味を失うことです。

友人がサラリーマンの生活を送り、定年を迎えました。定年になる2月も3月も前から、仲間や部下が毎晩のように飲みにつれていってくれました。定年の日を迎え、社長から辞命をもらい、若いお嬢さんから大きな花束を貰って、家に帰りました。辿りついたのが、午前2時。一人で帰れません、3人の部下が抱えてまいりました。ご機嫌でした。

一晩寝た翌朝目を覚まし愕然としました。起きて、行くところがない。昨日までごく自然に会社に足を運んでいたのに、今日どこへ行ったらいいのか判らない、今日会う予定の人がいない。昨日まで手帳はスケジュールでビッシリ。今日から空白。これほど孤独を感じたことはないと申しました。これが孤独です。孤独は役割を失うことでございます。孤独とは存在感の喪失です。今、それが私どもの問題なのではないでしょうか。

阪神淡路大震災の時、被災をした人々が仮設住宅に移りました。この仮設住宅で孤独死された方が230名おられます。その中のお一人は10カ月見つからなかったのです。東京の去年の孤独死は、901件です。その数はますます増えてまいります。



自殺も同じです。昨年、自殺者が34,000名で史上最悪でした。普段の年より約10,000名も多いのです。40代、50代の男性の自殺が続きました。管理職の受難時代でもあります。その中で、11,000人は60歳以上でした。年を取るにしたがって、自ら身を断つ人の数が増えていく痛ましい現象に、私たちは際会しております。この老人の自殺は世界トップクラスで、特に女性の自殺は世界第2位という高さです。豊かになった。しかし心の貧しさがございます。そして社会の中で不安を抱いております。

20年程前から、国際的に「不確実性の時代」といわれました。不確実というのは先が読めないのです。立っている足元さえおぼつかない不透明にして不安定な状態を不確実性という言葉であらわしました。日本でも同名の書籍がベストセラーでした。

経済成長がつかずきましたのが、石油ショックでした。狂乱物価になりトイレトペーパーの取り合いをしました。バブルがきて、地上げがあつて、バブルがはじけた途端、経済不況、金融不安、構造汚職、組織犯罪、大きな企業が一晩で消えても、もう不思議に思わないという時代になってまいりました。

こうした中で、私どもは実に不安です。この不安をどうやって克服するか、いつのまにかそれに対応する生き方を身につけてまいりました。三つございます。

第一は、現世幸福主義です。明日が約束されないのならば、今日幸せでありたい。高校生の60%が将来に希望がないと答えています。実に不安です。今、幸せでありたいという欲求をますます私どもは強めてまいりました。

第二は、マイホーム主義です。ある精神医学者が要塞家族と呼びました。家族のまわりに砦を築いて、人の中に入らず、自分も外に出ていこうとしない。ますます内に籠もってまいります。正月3が日に、初詣にでかけた方が8,700万人という記録を作りました。初詣は五穀豊穡を祈ったものですけれども、今初詣に行かれる方々はいろいろな願をかけます。安心立命、商売繁盛、無病息災、家内安全、学

校合格といろいろございます。そのわりには、皆さんあまり賽銭をお出しなっていない。ある神社に、「〇〇大学に合格をさせてくれれば、賽銭を出します」という絵馬がかかっておりました。(笑)取引をしているのです。初詣にでかける人の中で、世界の平和を願い、人の幸せを祈れる人がどれだけのいるのか。私どもはますます自己中心になってきたのではないかと。

第三はシステム依存です。システムは法律、制度、行政です。福祉国家体制を戦後日本はめざしてまいりました。福祉国家は国家責任ですので、すべて行政が面倒を見るべきだという観念を植え付けられました。それは私どもの生活も同じで、家の前にゴミが落ちていても自分で掃かないで役場に電話して、「拾え」と言ったのです。役所では“すぐやる課”がやはり、次から次へとそういう課ができ、電話がかかってくるとすぐ職員がドブさらいに出かけるということをしてきたのです。私どもは行政の責任の追求をする。それでいながら、手をこまねいて、自分の体を動かさないことを覚えました。

阪神淡路大震災にみまわれました。神戸市長は笹山さんという大変立派な方ですが、神戸市長が神戸市の災害の状況を把握できたのは12時間後でした。神戸市役所の五階がベチャンコ。水道局でしたので、神戸市の水道復興が大幅に遅れました。つまり行政がまったく動けない状況でした。一番大きな被害を受けたのが長田区で、そこに真野地区という住民活動の盛んな地域があります。ここで救助された人の4人に3人は近隣の人によってです。区役所でもなく、消防でもなく警察でもなく、自衛隊でもなく、隣の人が倒れた家屋から助け起こしたのです。隣の人と助け合わなければ生き抜くことができないことを、経験しました。行政が機能しない。これを補ったのがボランティアでして、ようやく市民が最低生活を維持することができたのです。

こうしたことを通して、改革ばやりになりました。行財政改革、ビッグバン、農林の改革、教育改革、福祉も基礎構造改革をしたところ。システムの転換です。ではシステムをどう変えるのか。

東京、芝・愛宕山はNHKの発祥の地で、古くからあります愛宕神社に81段の石段があります。曲垣平九郎が馬で一気に乗り上げた講談に出てくる石段がそのままございます。石段の下に立って上を見上げますと、私はこわくて登れない。実に急で、しかも幅はせまく、踊り場がありません。足を踏み外したらどうなるかという心配が先に立ち、登る意欲がわいてまいりません。これが、戦後私どもが造ってきた社会構造です。5階建てのアパートでエレベーターをつけなくても、建築基準法は許可になります。エレベーターがありませんから、5階には年寄り、障害者、妊婦、乳児は生活ができない。そのままにしてまいりました。すなわち、働ける健康な若者を中心に社会を造ってきたのです。これを変えようというのがシステムの改造です。

沖縄本島の北部に今帰仁という400年前に出来たお城があります。このお城に上がる83段の石段を、村人たちが汗を流して作りました。幅が広く、奥行きがあり、しかも傾斜はなめらかで、その上、3段、5段、7段ごとに踊

り場が設けられています。私でも、ゆっくり登って行くと、いつの間にかお城に到達できるのです。これが、私どもがこれから作りたいシステムです。

年寄りが、障害者が、妊婦が、安全であるだけでなく、かつ快適に生活できる条件を造らなければならないのです。年寄りが、乳児が快適に生活できる条件は、健康な若者にとっても快適なのです。難点は、金がかかるのです。この金を出す用意があるかを、私どもは問われているところで

す。神奈川県に県立高校が165校ございます。その高校にエレベーターをつけています。エレベーターを1機つけますのに1億円かかるのです。自分の学校に1億円金がかかることがわかりますと、生徒も、教師も、PTAも、地域の人も、それならあれを買え、これを直せ、色々の要求が出るのが当然です。にもかかわらず、今、次から次へとエレベーターをつけています。



それは障害をもった生徒がいるからではないのです。いつ障害をもった生徒でも入れるように、父兄参観に来た妊婦でも、あるいは昔話をしにくるお年寄りでも自由に使えるようにという配慮です。障害を持っている人と、持たない人が出発点を等しくするというのが、ノーマライゼーションという思想なのです。そういうシステムを作らなければならない、と考えているのです。

こうしたりっぱな建物はたしかに金があればできます。しかし、この金の出どころ、財源が大きな問題になってまいりました。金の出どころは、三つしかございません。租税でまかなうか、保険か、あるいは自己負担か。

私ども、今まで租税！租税！国でやれと言ってきたのですが、それではまかないきれなくなりました。介護保険は社会保険方式を採用したわけ

です。働いている階層はあまり昔も今も変わってませんが、老人が増え、子供が減ってまいりました。私の子供のころは、14歳以下の子供は36%いたのです。家族も大きかったです。私は10人家族で育ち、兄弟6人、男で4番目、だから志郎です。私の受持ちの先生は一郎先生でした。昭和15年に日本で10人以上の子持ちの親を政府が表彰したのです。1万4千世帯でした。今、10人以上の子持ちを表彰するとすればいったい何人いますでしょうか。家族がだんだん小さくなりまして、核家族化されました。昔は老人は4%でした。それが一昨年の6月に日本の歴史で画期的な事が起こりました。老人の数が子供の数を上回ったのです。そし

て、ますます、この格差が広がってきています。昔は10人の働ける人が、1人の老人をささえたのです。現在、4人で1人をささえております。これが2040年になりますと、2人で1人の老人を扶養しなければならないことになるわけで、大変重荷が加わってくるのです。はたしてそれに耐えられるかが大きな問題でして、この負担と給付をどうするかが、日本の政策課題になってまいりました。しかし、みんなが負担をしあわなければ、社会の問題を解決し、新しい文化を作ることはできないことはあきらかです。

金をかければ物はいくらでも買えます。しかし、金をかけてもできないものがあります。JRの大きな駅で、障害者がエレベーターに14時間待たされる事件が起きました。JR東日本に1700の駅がございまして、障害者がのれるエレベーターがついているのは、横須賀市も大変一生懸命やっているとございまして、JRで申しますとまだ100そこそこなのです。ですから、障害者がのれるエレベーターが設置されていることは、最新式のシステムが整備されているのでして、大変望ましいことです。ところが、そのエレベーターに障害者が乗ったら、車椅子からボタンに手が届かない。そのまま14時間閉じこめられました。その間だけ一人心を配った人がいなかったのです。どんなりっぱな設備をほどこしても、人が関わらなければ十分に機能いたしません。この人と人の関わり、これが教育の、医療の、そして福祉の命です。この人と人の関わりを、これからどうしていったらいいのかが、私どもにとっての、大きな課題になってまいります。



ワシントンの大使館で働いております若い外交官の物語です。3歳のお嬢さんが、夜遅く引きつけをおこした。私も娘が引きつけを起こしたことがあり、よく分かるのですが、どうしてよいのか分からない。あわてて電話をとりました。アメリカですと911番かと思いますが、救急を頼む。ところが、英語で説明できない。もう気が動転しており、英語が出てこない。奥さんが替わった。奥さんも「ヘルプ。」「ヘルプ。」と言うだけで、何も言えない。そうしたら交換手は、「あなたは何語をしゃべるのか。」「ジャパニーズ。」といったら、途端に日本語を話す人に替わった。容態を説明したら3分半後に20人救急隊が来た。その中にドクターがいて、すぐに診察をして病院に入院することになった。「ご主人は後始末をして荷物を持って来てください。」と言われて、主人だけ残り、奥さんと子供は病院へ運ばれた。荷物の整理をしているとそこにドアをノッ

クする音がして、開けてみたら隣のご主人が「何かお役に立つことがあれば、すぐに電話をしてくれ。」と申し出ました。しかも、自分の家の電話を大きな紙に書いて持ってきた。幸いに検査を受けて、たいしたことがなかった。翌朝早く、その病院に入院したお嬢さんの幼稚園の園長さんが、どこから聞いたのか見舞いに飛んできてくれた。病室では、幼児用のビデオを楽しみ、電話は使い放題。2晩入院し、退院をした。退院したところで請求書が届いてびっくり。40万円。2晩で40万円。救急隊の費用も入っているのですが、びっくりした。幸いに保険に入っていましたから、保険で支払われますけれども、一時立替え払いをしなければならなかった。

アメリカでは、4000万人が無保険です。保険に入れないか入っておりませんので、治療を受けられないのです。これが、アメリカの大きな社会問題で、クリントンの奥さんのヒラリーが委員長になって改革案を作りましたが、議会を通りませんでした。それでもアメリカは、私どもとどこか違う所があると思います。救急車のサイレンを聞いて、隣の人がすぐに協力を申し出る。翌朝、園長が来てくれる。こういうことは私どもの場合には起こりにくいのです。

私はこの横須賀にまいりまして、4回引越しをしております。引越しをする時には、新入りですので、引越しそばならざる、タオルを持って近所の家を廻りました。先日、新しく私の家の近くに越して来た人がせっけんを持って、あいさつに見えました。新しく移って来た者が、元からいらっしゃる方に新入りのあいさつをする。これが、いわば礼儀です。

ところがアメリカでは、新しい人が越してまいりますと近所の人が行くのです。歓迎の意を表すとともに、ゴミ出しをどうするか、ミルク・新聞をどうやって取るかという生活のノウハウを伝えるのです。新しく来た人が近所に出向くか、近所の人から新入りを訪問するか。たいした違いでないようですが、ここに文化の大きな違いがございまして。

私どもは仏教的にいえば、縁起の社会でして、血縁、地縁、そこにいれば縁で結ばれるわけで、新しく入るとまた新しい縁ができます。そこにおける生き方は、どうしても受動的になる、受け身になるのです。

ところがアメリカ社会は、新しく来た人を仲間に入れるために、新しい町を一緒に作りましょうという呼びかけとして、招きとして、古い人が新しい人の所へ行くのです。ここに、大きな違いがあるのではないかと思います。

隣という日本語は地境、境目という意味です。地理的概念なのです。隣という字に人格的概念はまったく入っておりません。そこで、neighborとかneighborhoodという言葉を使いますが、苦労したのです。neighborは、地理的概念ではなく、隣の人をさす言葉なのです。そこで、隣の次に人をつけ、隣人とか、となり人と、いささか座りの悪い言葉を私どもは使わざるを得ないのです。隣を地理的な境界線としてではなく、一緒に生活をして生きている人として捉える。ここが大きな違いではなからうかと思います。こうした人と人のつながりを、私どもはどうやってこれか

ら作って行けばよいのでしょうか。

皆様方の会社ではそうございましょう。社員一人ひとりにパソコンが配置されます。実に便利で、能率的で、外国の支店とも一瞬にしてコミュニケーションできるのです。この社員は、隣の人と話をしないのです。話をするのはムダなこと、何か言いたければ、ボードをたたけばよいのです。会話がなさいません。スーパーに買い物に行って、若い人が一言も言葉を交えずに買って出てきます。言葉がいらぬのです。言葉がなくなり、会話がすたれて行くのに悩んでいるのが一人暮らしのお年寄りです。二日も三日も人から言葉をかけられず、挨拶をする相手が見あたらない、こういう問題をかかえております。

電車に乗りますのに、券売機にお金を入れて切符を買います。実に正確です。私はイオカードを使いますが、どうやって釣銭まで一瞬にして記入されるのかが不思議でたまらない古い世代です。あの券売機が出回りはじめたころ、お金を入れても切符が出ないことがよくありました。性能がまだ悪かったのです。「切符が出ません。」と駅員に言うと、返ってきた言葉は、「本当にお金入れましたか。」(笑) 発達をしていく機械は信用しますが、人間と人間との間にますます距離が深まって行く。これが現実です。ハイテクの時代になって、私どもは手間ははぶいているのです。機械にやらせるわけです。その手間を省く時代に、人と人が関わり合うのは、手間がかかることですから矛盾しているのです。この矛盾を自分自身の中でどう納得させるかが、私どもにとっての新しい時代の課題ではなからうかと思えます。

そうした中で私は、人と人とのつながりを作って行く、ふれあいをおこしていく可能性を、確信をしております。

沖縄の離島、石垣島の奥に西表の島がございまして、この西表からさらに南に、人の住んでいる一番南端の島を波照間と申します。この波照間島に戦争中、日本の陸軍がまいりまして、島民を強制疎開させました。どうやら、800頭いた牛、馬、そして鶏を徴収するためであったと言われていたのですが、むりやり軍刀で脅して島民を疎開させたのです。

1275名、この島民が波照間から西表のハエミという海岸に疎開しました。実に不便な所で、食べる物が無い。その上にマラリアが蔓延して、たくさんの方が、最後は約400名の方が、死ぬのです。その中に66名の学童がおりました。これを引率したのが、「シキナマスノブ」という校長でした。識名校長はそれに非常に責任を感じました。そして、ハエミに、波照間に向けて石をおき、「忘而石 ハテルマ シキナ」と十文字を印しました。

子供を失った痛恨の思いを込めて作ったのだと思います。子供たちは死んでいった。しかし、自分は生き延びている。この感情を、沖縄では「チムグリサ」と呼びます。チムグリサとは、胆が苦しむと書くのですが、本土の言葉に訳しようがありません。同じ沖縄の離島で、軍が次から次へと軍事施設を設置して廻りました。ある島では島民がそれに反対をした。反対の先頭に立ったのは小学校長。沖縄は、教育者が非常に尊敬をされているところとして、小学校長

が先頭に立った。まあ、軍もあまり必要を認めなかったのか、引き上げた。まわりの島は、米軍の砲撃で壊滅していった。しかしその島だけ、軍事施設がないために生き残った。そのことにその島の小学校長は、非常に心痛む思いをいたしました。これがチムグリサです。

今朝の新聞を読んでおりました、北朝鮮に日本が米の支援をした。その米が果たして民衆に届いているのかどうか、日本の政府の高官が北朝鮮にまいりました。北朝鮮の高官が、その人を案内した。届いていた。そしてある子供の施設に行ったら、たくさん孤児がいた。その悲惨な孤児の様子を見た北朝鮮の高官が、「自分の子供はいい暮らしをしているのに、この子供たちは…」と涙を流したと、書いてあります。チムグリサだと思えます。

自分が幸せで、人が不幸なとき、私どもは喜びを覚えます。人が病気で苦しんでいるのに自分が健康なのは、幸いです。それが人間の情でありますけれども、自分が健康で人が病気で苦しんでいるのを済まない、申し訳ない、という感情がチムグリサと呼ばれるのです。子供たちが死んでいった、自分だけ生き残って申し訳ないという識名校長の思いが、石になって今でも残っているのかと思えます。

これが奉仕を支える根源だと思えます。これを私どもがこれからどう継承できるかが第一です。

第二は、家・村という伝統的共同体は崩壊しました。戦後になり、伝統的共同体は封建制のなごりだといって否定して、民法も改正をしたのです。今や、昔の家・村という共同体はございませぬ。にもかかわらず、大変おもしろいことに申しますか、珍しいことに、共同体のもつ風習を私どもは残してまいりました。世界でも珍しいのです。



どういう習俗が続いているかと申しますと、皆さま方が葬式においでになりますのに、香典を包みます。そうすると、半返し、場合によっては倍返しですが、香典返しを頂戴いたします。逆の場合には、頂戴した香典と同じ額を包んで持っていくのが、昔からの習わしでした。結婚式に招かれますと、祝い金を包みます。そうすると、どなたも持ちきれないほどの引出物を頂戴してかえってくる。このお返しを互酬と申します。互酬は、互いに報酬の酬で、互いに報い合う、いわばお返し主義です。田植えを手伝う。これを手間貸しと申します。今度は刈り入れを手伝ってもらう。これを手間返しと申しました。

ヨーロッパ社会では、葬式・結婚式に金を包むことは一切ございませぬ。もう随分昔に、共同体が崩れたときに、

その習慣はなくなりました。私どもは依然として、御中元・御歳暮、実に盛んなやりとりをしているのです。

こうした互酬は、いわば身内の中で、あるいは同じ職域の中でのお返しです。特定の人の中での行為です。これが少しずつ発展して、生活協同組合、農業組合、労働組合、あるいは在宅の福祉サービスなどがございます。有償ボランティアという言葉が使われますが、実費弁償程度の手当てを払いながら、仲間同士、組合員の中での助け合いが、澎湃として日本に起こっているところです。これは互酬の延長です。同じ組合の組合員の中での助け合いです。相互扶助でして、福祉ではないのです。見ず知らずの人に対する働きかけが福祉ですから。

北海道奥尻の災害の時、この市内のある特別養護老人ホームで一人のお年寄りが義援金を差し出されました。「私は関東大震災で助けられました。これはお返しです。奥尻に届けてください。」注目すべきことは、助けられたことのお返しをしなければならないことを70年忘れなかった。もうひとつは助けてくれた当事者にではなく、見ず知らずの奥尻にです。これが普遍化の可能性を示していると思います。



郵便局で定期貯金をしますと、その利息の一部がNGOに寄付をされます。現在、その寄付をしている方が2600万人になりました。身銭をきって、NGOの支援をしているのです。これをこれからどう発展をさせるのかということが第二です。

第三は、アメリカ社会は個人主義であるのにもかかわらず、アメリカ全体としては大変調和がとれた社会を作ります。それは、中間組織があるからです。教会があり、地域の団体があり、ボーイスカウトがある。アメリカには課税免除されている中間組織NPOが120万ございます。日本でNPO法案ができ、認証を受けて成立したNPOがようやく2500です。けたが違います。ロータリーは中間組織です。国際団体ではございますけれども、中間組織です。この中間組織としてのロータリーは血縁地縁をこえた社会でして、そこに新しい文化を指し示していると思います。ロータリーというアソシエーションをこれからどう皆様方が展開をしていかれるのかは日本社会にとっても大きな影響をもちます。広い意味でコミュニティを作るのです。コミュニティはどこにもありません。作らない限り。言い換えますと、コミュニティは形成概念でして、一人ひとりが心をついにし、力を合わせなければコミュニティ

は出来ないのです。そのコミュニティーをこれからどう作っていくかが日本の大きな問題ですけども、いったいそういう中でロータリーがどのような役割をお果たしになるのか。

ニュージーランドにまいりましたとき、ある一人暮らしをしている87歳の男性を訪問しました。この方が自分はそので死ぬとおっしゃいましたので、病院がケースワーカー、訪問看護婦を送り、ドクターが毎月往診をし、ホームヘルパーが3人手伝っている。この方に一日2食、食事が配食されてました。食事を配るボランティアがロータリークラブの方々でした。私はその晩、ロータリーのお話を伺いました。皮肉とユーモアを込めてですが、その方はこうおっしゃったのです。

「日本のロータリークラブは金があるから金を配っているだろう。わたしのロータリーは金がないから、老人に弁当を配っているのだ。」ロータリーにいたるまで、一人の年寄りがそこで生活をし死にたいのならば、町をあげてすべての資源でその人の生き方を支えよう、一人の人をみんなまで連帯をして助けよう、これがコミュニティーです。

このコミュニティーにこれから皆様方がどう取り組んでいられるのか。

大正12年9月1日に、関東大震災が襲ってまいりました。東京の小菅に今もございますけれども、刑務所がございました。ここは戦後戦犯を収容した刑務所です。この刑務所に1200名の受刑者が生活をしてました。ちょうど昼の食事に受刑者が集まってまいりまして、食堂に坐りました。その日はカレーライスだったそうです。今や食べかけようとした午前11時58分44秒、突然上下動の激しい地震が襲ってまいりましたので、みんなあわてふためいて食堂から庭に逃げました。振り返りますと、食堂の建物がガラガラッと目の前で倒壊しました。刑務所をとりまいてました3メートルの煉瓦塀が崩れたのです。塀が無くなることは受刑者にとって逃亡の絶好のチャンスです。現に、関東地方の刑務所の多くで、受刑者が逃亡しまして今もって行方不明という扱いになってます。その小菅の刑務所でも蜘蛛の子をちらすように受刑者が逃げはじめましたときに、だれいともなく、「有馬の顔をつぶすな。」と呼びかけた。「有馬に迷惑をかけるな。」有馬というのはその時の警務所長で、有馬四郎助という人です。「有馬があと困るぞ。」と。みんな逃げるところか、焼け跡からこん棒などを拾って、その晩みんなで刑務所をぐるりととりまいて警戒しました。「怪しいやつを中に入れるな。」と。(笑) ついに一人の受刑者も逃亡をしませんでした。国際的に伝えられたエピソードです。

当時刑務所では受刑者を番号で呼びましたが、有馬四郎助は、一人ひとりの受刑者に「～さん」付けで呼びかけたのです。有馬と受刑者の間に、心と心のふれあいがおこっていたのでございましょう。受刑者たちが一つ思いになって、コミュニティを作ったのです。

何故、私たちにコミュニティが出来ないのでございましょうか。